(4) 真理・真実・理想を求め人生を切り拓(ひら)く

真理とは、
誰(だれ)も否定できず、変わることのない道理であり、
真実とは、
うそや偽(いつわ)りのないことである。

人は古来から真理に憧(あこが)れ、真実を求め、
そのことに
生きることの意味や価値をも見いだしてきた。

これからの長い人生で、
私たちは様々な事柄(ことがら)に直面するだろう。
ときには喜び、ときには悩(なや)み、つまずきもするかも知れない。

たとえどんな境遇(きょうぐう)にあっても
真理を愛し、真実を求め続けること。
そのことが、理想をもって
自分の人生を切り拓く原動力になるのではないか。

「夢をもちたい」という願い

　中学生のころは、あれもやりたい、これもしてみたいと、自分自身のたくさんの未来像がありました。ところが高校生になってみると、どれも実現が難しいものだという気持ちがしだいに強くなってきました。いま、私には夢がありません。この先どのような目標を立て、どのように生きていけばよいのか…。進路の問題も、はっきりした夢や目標がない状態では、なかなか結論を出すことができず、自分の将来に、あせってしまうばかりです。
　夢は心の酸素だと思います。夢のない毎日はつまらなくて、とても長く、そして息苦しい。酸素なしで生きていけないのと同様に、人間は夢なしではきっと生きていけないのでしょう。夢をもってがんばる友達の目が輝(かがや)いているようで、とてもまぶしく感じます。

（高校生の投書より）

● この投書を読んで感じたことや、投書の高校生に向けたメッセージを書いてみよう。

「志を立てるのに
遅すぎるということは決してない」

こう言ったのは
イギリスの政治家スタンリー・ボールドウィン。
確かに、
伊能忠敬が志を立て、
測量を始めたのは五十歳を過ぎてから。
当時なら隠居してしまう年齢でした。

さあ、私たちも
自分の夢や理想について考えてみよう。
私たちは、まだ中学生、
もし、理想と現実に隔たりを感じたとしても、
それは無理だと、
最初から諦める必要はないのです。

■伊能忠敬（1745〜1818）
江戸時代の測量家。55歳のときに全国測量を始め、我が国で初めて実測による日本地図を作成した。

■スタンリー・ボールドウィン（1867〜1947）
イギリスの政治家。1928年、男女平等の選挙権を認めた内閣の首相。

あなたの夢や理想を実現するために
今、どうすることが大切なんだろう

●夢や理想の実現のためには、どうしたらよいか、友達や人生の先輩に取材しよう。

さんの考え

さんの考え

秘密

柴田トヨ

私ね　死にたいって
思ったことが
何度もあったの
でも　詩を作り始めて
多くの人に励まされ
今はもう
泣きごとは言わない

九十八歳でも
恋はするのよ
夢だってみるの
雲にだって乗りたいわ

■柴田トヨ（1911〜2013）
詩人。90歳を過ぎてから詩作を始める。
『くじけないで』など。

●理想をもって生きることについて学んだこと、考えたことを書いてみよう。

1年

2年

3年

column
人物探訪

「そうかもしれん、そうでないかもしれん、ようわからん。」

大学の講義での湯川博士の口ぐせである。そして「近頃の学生は『はっきりしてへんことは聞かんでもええ』と言うんや。」とぼやいたという。

たったこれだけのエピソードに、湯川博士の真理を愛する姿勢が見て取れる。学問というのは常にそのフロンティアをひろげていっているもので、その先端ではまだまだ解明できないことがいくらでもあり、ああでもない、こうでもない、と思い巡らすプロセスこそが重要であることを湯川博士は学生に伝えたかったのだろう。

世界的な科学者が飄々としながら分からないことを謙虚に受け止めている姿は、「人間湯川」の大きさを感じさせるとともに、真理や真実を探求する者にとって最も大切なことを教えている。

また湯川博士は著書の中で「現実は決して真実の全部ではない。」とも記している。現実の背後にある広大な真実の世界を探し続けた、湯川博士の強い思いが伝わってくる。

後にノーベル賞受賞につながる「中間子論」を発見した当時に住んでいた、苦楽園（兵庫県西宮市）の小学校の校庭に建つ記念碑には、湯川博士の「未知の世界を探究する人々は地図を持たない旅人である。」という言葉が刻まれている。

未知の世界を探究する人々は
地図を持たない旅人である。

湯川秀樹

●東京都出身。物理学者。昭和10（1935）年に発表した「素粒子の相互作用について」と題する論文は、後に世界でも注目されるが、第二次世界大戦で検証が先延ばしになった。●戦後、宇宙線の中に湯川博士の予言していた中間子が発見され、昭和24（1949）年に日本人として初めてのノーベル賞（物理学賞）を受賞した。京都大学名誉教授。大阪大学名誉教授。

湯川秀樹（ゆかわひでき）　*1907〜1981*

ノーベル賞を授与される湯川秀樹

saying
この人のひと言

未来はいくつか名前を持っている。
弱者にとっては「不可能」。
臆病者にとっては「不可知」。
考え深く勇気のある者にとっては「理想」。

ユーゴー
■ヴィクトル・ユーゴー（1802〜1885）
フランスの作家。『レ・ミゼラブル（ああ、無情）』『ノートルダム』など。

大切なのは
疑問を持ち続けること。

アインシュタイン
■アルベルト・アインシュタイン（1879〜1955）
ドイツの物理学者。相対性理論を発表。

心で見なければ
本当のことは見えない。

サン=テグジュペリ
■アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ（1900〜1944）
フランスの作家、パイロット。『星の王子さま』『夜間飛行』など。

●あなたの見付けた言葉、考えたこと。

(5) 自分を見つめ個性を伸ばす

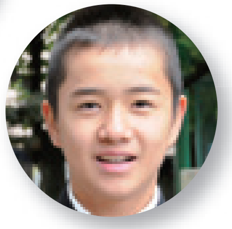
誰にでも、自分はこうありたいという思いがある。
その思いを糧に、
日々、自己の向上や改善のために努力していく。
だが、一方で私たちは、
自己本位な考え方にこだわって空回りしたり、
他人と比較して、
一人思い悩んだりすることもある。
自分自身の良さは、どこにあるのか。
そして、それを
どう伸ばしていくことができるのだろうか。

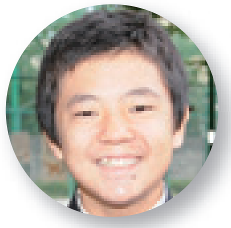
丸ごと自分を好きになる

自分の良い所を
発見しろと言われても
短所や欠点ばかりが
気になってしまう。

自分の良い所も、
変えたい所も、
丸ごとひっくるめて
好きになれたら
自分をもっと輝かせることが
できるはず。

人間は成長し、
変わっていくもの。
こうありたいと思う自分を見つめ、
昨日よりも成長した
自分になりたい。





色や色彩を表すカラー(color)という語には
固有の持ち味、という意味もあり、
個性を「その人のカラー」などという場合もある。
よく、「個性を伸ばす」というが、それは
固有の持ち味をより良い方向へ伸ばすこと、
自分のカラーをより輝かせることである。

私のカラー

あなたらしさがあなたの良さになる

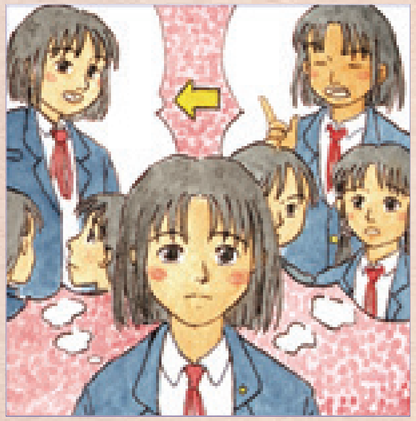
自分自身で嫌だと思っている所も、
見方を変えて磨きをかけることで、
輝く個性になるかもしれない。

自分の良さは、
どこか別の場所にあるのではなくて、
今もっている
あなたの特徴を磨くことで、
輝き出すものなのかもしれない。

ぼくの「おしゃべり」は、

人を引き付ける「話し上手」になるかもしれない。

私の「頑固さ」は、



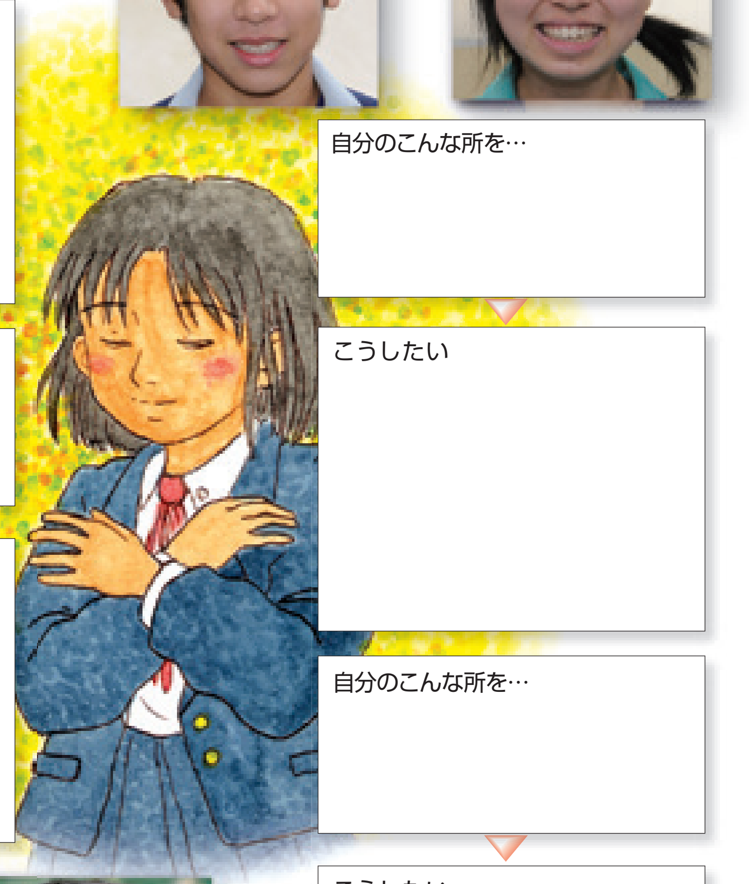
信頼される「芯の強さ」になるかもしれない。

自分の中にある「良い所」「改めたい所」

自分の中にある「良い所」「改めたい所」。
自分の良い所には更に磨きをかけ、
十分ではない所は改善していきたい。
そういう心掛けが、あなたの個性を伸ばしていく。

自分のこんな所を…

こうしたい



自分のこんな所を…

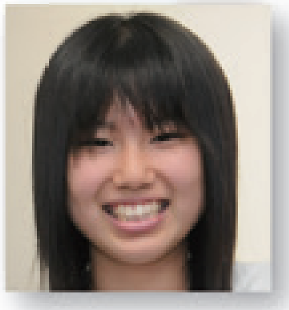
こうしたい

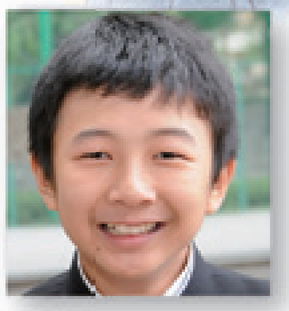
自分のこんな所を…

こうしたい

自分のこんな所を…

こうしたい





message

メッセージ

平成二十四（二〇一二）年、iPS細胞（人工多能性幹細胞）の研究でノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥さん。

高校時代に柔道をしていた山中さんは、自身の体験から整形外科医を目指しました。しかし、研修医として初めて勤務した病院で、上手な人なら二〇分で終わる手術に二時間もかけてしまうことがありました。「お前はほんまに邪魔や。」と山中さんは指導医に怒られ、ついたあだ名は「ジャマナカ」。

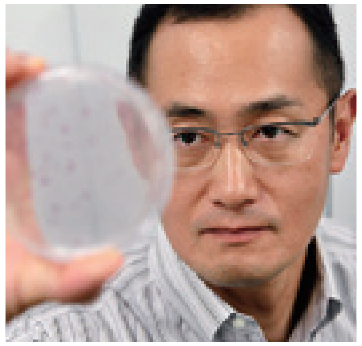
実験程度ならうまくいくのですが、人間が相手だと緊張して思い通りにできないのです。手術を満足にこなせないということは、整形外科医として致命的な弱点です。山中さんは最初から大きな壁にぶつかっていました。

そして、あるときリウマチ患者を担当します。全身の関節がみるみるうちに変形する重症でした。「いくら神業のような手術テクニックを持っている医師にも治せない病気や怪我がある」

このことを悟った山中さんは、難病で苦しむ患者を救うため研究者としての道を歩むことを決意したのでした。

「一番つらかったのは、基礎研究の世界に身を投じた後、自分の研究が本当に人の役に立つのか、何の意味があるのかわからなくなった時期です。そのころは臨床医に戻りたいと思っていたのです。でもいまは戻りたいと思いません。臨床医に戻っても、ぼくがこれまで出会った難病の方たちは治せませんから。

ぼくの父は、息子が臨床医になったことをとても喜んで死んでいきました。ぼくは医師であるということにいまでも強い誇りを持っています。臨床医としてはほとんど役に立たなかったけれど、医師になったからには、最期は人の役に立って死にたいと思っています。父にもう一度会う前に、是非、iPS細胞の医学応用を実現させたいのです。」ノーベル賞受賞後、山中さんが語った言葉です。



医師になったからには
最期は人の役に立って
死にたいと思っています。

山中伸弥

●大阪府出身。医学者。神戸大学医学部卒。大阪市立大学大学院医学研究科、米国グラッドストーン研究所、奈良先端科学技術大学院大学などを経て京都大学iPS細胞研究所所長。●人間の体細胞に、ごく少数の遺伝子を導入し、培養することで、様々な組織や臓器の細胞に分化する能力をもつ人工多能性幹細胞（iPS細胞）に変化することを発見。ノーベル賞（生理学･医学）を受賞した。

記者会見する山中さん

山中伸弥（やまなかしんや）*1962〜*

saying

この人のひと言

初心忘るべからず

世阿弥
■ぜあみ（1363〜1443）
猿楽師。父、観阿弥と共に能楽を大成。『風姿花伝』『花鏡』など。

人は人　吾は吾なり　とにかくに
吾が行く道を　吾は行くなり

西田幾多郎
■にしだ きたろう（1870〜1945）
哲学者。『善の研究』など。

「自分はだめじゃないか」
という気持ちをもっていないと、
進歩がありません。

河合隼雄
■かわい はやお（1928〜2007）
臨床心理学者。元文化庁長官。『昔話と日本人の心』『明恵　夢を生きる』など。

●あなたの見付けた言葉、考えたこと。

自分を深く見つめて

一本の道を

坂村真民（さかむらしんみん）

木や草と人間と
どこがちがうだろうか
みんな同じなのだ
いっしょうけんめいに
生きようとしているのを見ると
ときにはかれらが
人間よりも偉（えら）いとさえ思われる
かれらは時がくれば
花を咲かせ
実をみのらせ
自分を完成させる
それにくらべて人間は
何一つしないで終わるものもいる
木に学べ
草に習えと
わたしは自分に言い聞かせ
今日も一本の道を行く

私の人生は、誰（だれ）のものでもなく私自身のもの。
周りに流されそうになったり、
投げやりになったりすることもあるけれど、
自分を見つめ、在るべき自分の姿を描（えが）きながら生きていきたい。
誰にも任せることはできないのだから。
前を向いて、一歩一歩歩いていこう。